

(博士論文要約)

日本国際美術展（東京ビエンナーレ）再考—戦後日本の美術史形成に関する研究—

山下晃平

戦後日本の美術史は、画壇の再生からその後、前衛的な活動をクローズアップすることで、欧米のいわゆるモダニズムの終焉から制度としての「美術（芸術）」の拡大へという流れに呼応しつつ形成されてきた。しかしその一方で日本の美術界総体としての動き、芸術環境そのものを検証する試みはまだ充分になされてはいない。つまり日本の戦後美術史が、どのような価値判断と社会的背景との相関関係によって形成されていったのかという視点もまた、今後一層重要となる。そこで本研究は、戦後日本に興った大型美術展の構造変化に注目する。時代の動向との関わりが深い大型美術展を対象とすることで、日本の芸術環境の位相を捉える。特に1952年に誕生した戦後日本初の国際美術展「日本国際美術展（通称、東京ビエンナーレ）」を再考することから始め、さらに同時代の大型美術展の構造的な位相を検証することで、戦後日本美術史に関する新たな視座を提供することを狙いとする。

戦後日本の美術動向に関しては、瀬木慎一『戦後空白期の美術』、針生一郎『戦後美術盛衰史』、そして千葉成夫『現代美術逸脱史』がある。しかし日本国際美術展については、部分的な説明に留まっており詳しく論じられてはいない。日本国際美術展に関する先行研究としては富井玲子の論考があるが、第10回日本国際美術展「人間と物質」展に焦点を当てている。本研究は日本国際美術展を包括的に捉え、その総体を明らかにする。またこれまでの研究及び批評は、前衛的な作家・グループに注目し、その活動を海外とのインターフェイス、主として欧米の美術動向から分析する傾向が強い。日本の戦後美術史形成に関する要点に、そのような批評の価値基準、バイアスの問題がある。戦後日本美術の研究においては、まず画壇の再編より始まる美術界そのものの構造を把握し、その志向性、即ち組織・展示・作品に係る価値基準や批評のベクトルを検証する必要がある。

日本国際美術展は、毎日新聞社が主催となり1952年に第1回が開催され、1990年の第18回で幕を閉じる。時代の動向とともに変遷を余儀なくされているが、まだその総体的な検証はなされていない。本研究では、図録及び言説資料に基づき、日本国際美術展の歴史的な役割、意義そして問題を捉える。そして日本国際美術展の変遷を踏まえた上で、同じ時代を並走した他の大型美術展、姉妹展である「現代日本美術展」や「読売アンデパンダン展」、そして60年代以降に隆盛する野外での彫刻展や美術展との比較研究を進め、大型美術展の構造的な位相とその文脈を明らかにする。またこの大型美術展の検証により浮かび上がる、近代以降続く西洋に起因する制度としての「美術（芸術）」受容と日本の文化的コンテクストとの問題に注目する。明治期には、国粋主義や美術教育、博覧会においてこの問題は表出してきたが、戦後は大型美術展を舞台に再びこの問題が表出している。

日本国際美術展の構造及び批評に係る言説的アプローチの結果、日本国際美術展という組織体は、画壇からの脱却と前衛への移行が見出されるものの、その選抜や展示形式、そして批評の価値基準において、「美術（芸術）」の制度性、即ち「表現」における形式や近代的ジャンル区分に意識的・無意識的に牽引され、前衛における内在的な保守性、また国内画壇によるヒエラルキーの問題を孕む。また批評においては、50年代の「民族性」の議論を始め、60年代にかけての「国際性」「同時性」に係る重要な批評の場を形成するが、それは「日本の独自性」に対する探求を促進するものの、批評に内在する欧米の価値基準、西洋に起因する「美術（芸術）」概念への志向が遮蔽されつつ作用するため、60年代末に頻出する「国際的同時性」の文脈において、日本の独自性を十分に発信し得ない。この問題は、同時代を並走した他の大型美術展との構造比較によって、一層明らかとなる。

また60年代以降には「美術館から野外へ」というもう一つの志向が生じるが、野外美術展の構造及び批評のベクトルには、日本国際美術展と同様の問題を引き継ぎつつも、一方で「美術（芸術）」からの逸脱性の問題が表出する。この「制度」受容とその牽引力あるいは逸脱の問題は、日本文化論や日本思想史において、戦前戦後に抛らず常に議論されているが、戦後の「美術（芸術）」領域においてもまた密接に関わっている。90年代以降の国際美術展や大型美術展においては、「国際性」の文脈に「地域性」を内包することによって、「展示」を軸としながらもその周縁に人と人が行き交うプラットフォーム構造を持つ形へと、大型美術展そのものの位相変容が起きている。

このように本研究は、「日本国際美術展」の再考とそれを補完する大型美術展の構造変化を検証することによって、「日本」という特定の場における美術界の構造とその歴史性を明らかにしている。この視点は、従来の前衛的な作家・グループに焦点を当ててきた戦後日本の美術史形成に対して、新たな視座をもたらす。歴史はその長い時間によって、重大な事実や価値体系を覆い隠す力がある。本研究を通して、近代以降続く制度としての「美術（芸術）」の受容と、脈々と続く日本独自の文化的価値体系とが、美術界の構造・批評の価値基準において密接な関わりにあることを捉えた。この状況こそが、日本という場であり、戦後日本の美術史形成に関わる。本研究は、日本国際美術展をそのための出発点として位置づけ、その総体を明らかにしている。